



Title	宣長の歌論の温床について
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1955, 16, p. 18-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68488">https://hdl.handle.net/11094/68488</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 宣長の歌論の温床について

宇佐美喜三八

る。さうして宣長が漢学から学んだものは、もとより政治思想のみには限らなかつたのである。

宣長自身は晩年に書いた「うひ山踏」の中でも、「からぶみをもまじへてよむべし。漢籍を見るも、学問のために益おほし」といつて、漢籍を読む上の注意を説いており、生涯を通じて、学問のために漢籍から撰取した所は多かつたであらうと想像せられる。

さていま、和歌に関する問題について見れば、「玉勝間」卷十に「詩の事いへるから人の詞一ツ二ツ」と題して、次のやうに述べてゐる。

「このろ」を排斥して、国粹的な思想を尊ぶ精神の強かつたことは言ふまでもないが、漢学に浅からぬ造詣のあつた事実も、また彼の著書を見れば自明のことであらう。宣長の学恩を蒙つた先進として、大平が孔子を始め漢学者の名を挙げることを忘れなかつたのは、佐佐木博士の評せられたやうに、まことに妥当な見解であると言はなければならぬ。政治思想における徂徠学と宣長学との関聯については、すでに丸山真男氏の好著「日本政治思想史研究」(第一章・第四節)に詳細な論考があつて、宣長の学問・思想に徂徠学から継承したもののあることは、もはや否定し得ない事実であると認められ

厳滌浪が詩話といふ物に、詩之是非、不必争、試以己詩、置之古人詩中、与識者觀之、而不能辨、則眞古人矣、といへることあり。哥もざること也。又王敬美が秋圃摘余といふものに、余嘗服明卿五七言律謂、他人之詩、多於高廈失穎、明卿詩、多於穎所藏高、といへり。これ又哥もざること也。凡てもろこしにて、宋明のころなど、詩の事を論じたるに、哥とこゝろばへのもはら同じき、かゝるたぐひのこと多かり。わからゝりしほど、かうやうのからぶみどもを、いささか見たりし中に、おかしとおぼゆるふしべ、ぬき出て書おきつるが、ものそここのこれるを、引出で見れば、今もおかしきことぐも

のまじれるを、ひとつ二つ又ぬき出づる也。

宣長は遊学時代に漢学を修め、詩作に心を染めた時代があつた。詩論の書を披見したことは当然である。同時に和歌を嗜んでいた彼は、詩論を歌論にあてはめて考へたのであつた。巣羽の「滄浪詩話」や王敬美的「秋圃摘余」は、徂徠一派の尊んだもので、この二書に

徐昌毅の「談芸錄」を加へて、「三家詩話」と題し、徂徠の序を附した書が享保十一年に刊行せられてゐる。そのやうな詩話の類を読んで、宣長は和歌の工夫をもめぐらしたのである。宣長の歌論に漢学の影響があることは自然に推測せられる。まして本格的に漢字を修めてからほど遠くない時代に成つた彼の歌論には、種々な意味において、漢学と交渉のあることを考へなければならないであらう。かうして宣長の歌論を研究する上で、漢学との交渉といふことは、一つの大きな問題となり得るのである。

宣長の歌論と漢学との交渉を考究するにあたつて、先づ顧みるべきは、宣長の漢学履修に関する事柄であるが、漢学履修と歌論との関係を見る上では、その漢学の師であった堀景山の人物や学問・思想などを無視することはできないと思はれる。宣長の日記によれば幼年時代の彼は漢学の教養としては、十二歳の頃から町の師匠について四書や小学の素読を習つたやうで、後に山田の今井田氏の養子となつてゐた時代、「二十歳であった寛延二年の十月二日から正住院の住主を師として、「易經」・「詩經」・「書經」などの素読を習つてゐる。これらはいふまでもなく、町人としての教養として学んだのであつて、真正の意味で漢学を修めたとは言ひ難いものである。本格的な漢学の履修は、今井田氏から離縁となつて後、未亡人であつた母の意志に従ひ、宝曆二年三月医学を学ぶために上京して、堀景

山に就いた二十三歳の時から始まると思なければならない。さうして堀景山に就いたといふことは、宣長の漢学の教養のみでなく、国学者としての素地や、歌学の萌芽を開き伸ばす上にも大きな関係を持つに至つたのであつた。

## 二

堀景山は宣長の漢学の師であるとともに、宣長が新しい歌学に目を開き、国学に志す機縁を与へた人としても知られてゐる。当時の儒者の風に従つて堀景山とも呼び、その略伝は「近世叢語」卷四や「諸家人物志」卷上などに見えるが、明治四十年に広島史神祭典会から出版された冊子「鉛屋祭記念」に收められた、中村久四郎氏（中山久四郎博士）の堀景山伝には、やや詳しい評伝が見られる。景山は名は正超、字は君燕、惺窟門の四天王といはれた堀杏庵の曾孫に當る。元祿元年代々の儒者の家に生まれて、業を父の玄達より受け篤学精進の誉れが高く、和厚な人となりをもつて後進を誘掖した。父祖以来安芸侯に仕へ、享保四年九月、三十二歳の時、藩主浅野吉長に用ひられてその側儒となり、吉長の後に宗恒にも仕へたが、平素は京都にをり、時々広島に赴いて進講し、広島藩学の基礎を作るのにも与つて力があつた。宝曆七年九月十九日、京都において病歿享年七十七歳、宣長が就いて学んだのは景山の晩年で、死後年至るまでの五年余の間である。学統の上からいへば、景山は惺窟を祖とする朱子学派の流を汲む儒者であつて、儒学系図の類を見ても朱子学派の中に入つてゐる。然し同時代の先輩であつた徂徠とも知己の間柄で、徂徠の古学思想から影響を受けた所があり、また契沖に私淑して國文や和歌の造詣が相當に深く、儒学においてのみならず、和

学においても新學問に心を寄せた人であつた。この漢學と和學との兩方面において新機運に目ざめてゐた進歩的な精神が、青年宣長に大きな感化を及ぼしたのである。

さて宣長は宝曆二年三月十六日に景山に謁して入門し、同十九日

から堀家に寄宿して景山の指導を受けることになった。その傍ら翌

年七月廿二日に堀元厚の門に入り医学を修めたが、翌宝曆四年一月

二十四日に元厚は死去、同年五月一日に武川幸順に入門して医学を

学ぶことになり、同年十月十日から武山家に寄宿、その後も景山に就いてゐたことは変りがない。在京中の学業や生活は「在京日記」三冊を通してほぼ窺ふことができる。宣長が在京中に学んだ書物で日記の中に見えるものを年次別に示すと、次のやうである。

宝曆二年

易經・詩經・書經・札記・左伝の順に二月から十一月までに五

経の素綱終了。

史記・晉書の会説。

左伝（景山の子蘭沢の講義）。

宝曆三年

史記・晉書・世說新語・蒙求・左伝の会説。

靈根・局方發揮・素問・運氣論・他一書

（以上の医書は元厚の講義）。

宝曆四年

史記・蒙求・歴史綱鑑・揚子法言の会説。

易學啓蒙（景山の講義）。

本草綱目（武川家の会説）。

宝曆五年

前漢書・莊子の会説。  
本草綱目（同前年）。

宝曆六年

莊子・南史・荀子・列子・武經七書の会説。

嬰童百問・千金方（武川家の会説）。

宝曆七年

文選の会説。

「在京日記」に出てゐる書は、以上のやうに師に就いて学んだ漢籍や医書ばかりである。後述のやうに上京後まもなく景山から契沖の著書を借りて読み、新しい歌学に心をひかれて、宝曆七年帰京の時までに、或は購求し或は書写した歌学書や物語の類など、和書の数は数十部に上つてゐるが（稿本全集・第一輯六七一頁参照）、それらを読んだり写したりしたことなどは日記に書かれてゐない。医者にならうと修業をしてゐた宣長には、漢学と医学とが表立つた学問であり、それらに身を打ち込むことが重要事であつて、和歌に関することは私的な趣味・教養に過ぎないと解したためであらう。

その間、詩会に列なり漢詩を作つてゐるのは、儒生の教養として当然のことといふべきである。この時代に宣長の作つた漢詩、漢文は「詩文稿」一巻に集められて、彼の若い日を記念するものとなつてゐる。

宣長は十九歳の寛延元年から和歌を詠み、宝曆二年二十三歳で京都遊学に出るまでの歌は「栄貞詠草」一巻に収められてゐる。また本居宣長によれば、十八九歳の頃に歌学書を涉獵して、和歌に関する諸説を抄録したものが四冊伝つてゐるといふ。（稿本全集・第一輯・三八頁参照）。さうした素地のあつた宣長は、景山に接する

ことによつて新しい歌学を知り、漢学を修める一方では、次第にその方にも心を寄せて行つたのであつた。宣長は京都遊學中に「百人一首改觀抄」を借覽して初めて契沖の業績に接し、その新見に心をひかれて「余材抄」や「勢語臆斷」を始め、契沖の著書を相次いで読み、次第に新しい歌学を体得するに至つた旨を後年みづから「玉勝間」卷二の「おのが物まなびの有りしやう」の中で述べてゐる。宣長に「改觀抄」を貸したのは景山であり、借りたのは景山に師事してから間もない頃で、宝暦二年五月十二日よりも前のことであつたと見なされる（本誌・第三輯所載・拙稿参照）。宣長は宝暦七年五月九日、景山本の萬葉集の書入を寫した奥書の中で、景山が今井似閑の門人樋口宗武と親交のあることを記してゐるが、景山は契沖の學問を尊び、宗武を授けて「改觀抄」の刊行にも関係してゐたのである。「玉勝間」卷二の「ふみども今はえやすくなれる事」によれば、當時契沖の著書は入手が困難であつたことが推察せられ、宣長の學問の生長の上から見れば、宣長が景山に就いたことは、まさしく生涯の幸運であつた。かうして宣長は景山を師として、漢学を修めるほかに、契沖の著書に接する機会を与へられ、歌学書から出発して、次第に國書をも読むに至つた。

寛延二年、二十歳の頃、宣長は今井田氏の養子となつて山田にゐたが、その三月下旬から、宗安寺の法幢和尚に、和歌の添削を受けた（日記・参照）。佐佐木博士によれば、法幢の歌風はまつたく「草庵集」風の旧派のものであり（増訂和歌史の研究・五十六節参照）、前記の「栄貞詠草」には、法幢の批点のついた歌が入つてゐる。京へ遊學に出てからは、宝暦二年九月二十二日に、新玉津島社司の森河章尹の門人となつて和歌を学び、同社の月次会にも出席した。そ

の後、宝暦六年二月十五日から有賀長川の月次歌会に出席、翌年帰郷に至るまで熱心に出席したのであつた。森河章尹は冷泉為村の門人であり、有賀長川も二条家の流をうけた旧派の歌人である。そのため歌学の上では新しい機運を自覺しながらも、作歌の上で宣長は生涯旧派の風を脱することができなかつた。彼の著である「草庵集玉箇」の前篇は宝暦六年五月、京都遊學中に稿の成つたもので、真淵の門人になつて後、明和四年九月に刊行せられた。これに関して真淵が仮借する所なく宣長を叱責したことは、かなり有名な話である。宣長が遊京時代に詠んだ歌の数は、各年度の集の後に記された所によると、宝暦二年に三百五十四首、同三年に三百十一首、別記されたもの三十五首、同四年に二百九十七首、同五年に二百六十五首、同六年に百六十二首、同七年に四十六首、合計千五百首に近い数となる。歌の数が次第に減つてゐるのは、恐らく学業の方が忙しくなつて來たことにも関係するのであらう。然しいづれにしても、このやうに宣長は儒・医を学びながら和歌の道にも心を入れてゐたのであつた。

### 三

宣長は漢学を学ぶ傍ら和歌にも励んで、彼の歌論はこの遊京中の教養を温床として形成せられたのであるが、景山の思想が宣長の歌論の中にも流れ込んでゐることは、すでにある程度まで言はれてゐる通りである。ただ然し、景山の思想と宣長の歌論との関係は、いまだ必ずしも具体的に詳しく検討せられてゐるとは思はれない。それで、今ここに景山の學問や思想について、宣長の歌論との関係を知る上で必要と思はれる問題に関し改めて考へてみることにする。

景山は前述のやうに朱子学の系統を引く学者であるが、学界の新傾向を自覺してゐて、朱子学一偏の儒学者ではなかつた。彼の思想に徂徠の思想の影響のあることは、否定し得ない考へる。徂徠が景山の問ひに答へた書は「徂徠集」卷二十七に二篇あつて、その中の「東都物茂卿謹復書西京屈君足下」。七月中秋日。……で始まる方の一篇は、「徂徎先生學則」の附録にも收められてゐる。その中で徂徎は学問の道は古へに本づくといつて、古文辭学の精神を鼓吹してゐるのであり、「蓋古文辭之學、豈徒說已邪。亦必求<sup>レ</sup>出<sup>ニ</sup>諸其手指焉。能出<sup>ニ</sup>諸其手指<sup>ニ</sup>而古書猶<sup>ニ</sup>吾之口自出<sup>ニ</sup>焉。夫然後直与<sup>ニ</sup>古人相<sup>ニ</sup>揖於一堂上。不<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>紹介<sup>ニ</sup>焉」、「夫六經、皆事也。皆辭也。苟媚<sup>ニ</sup>辭<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>。古今其如<sup>ニ</sup>際<sup>ニ</sup>諸掌<sup>ニ</sup>乎。於是回<sup>レ</sup>首以說<sup>ニ</sup>後世之書。萬卷雖<sup>ニ</sup>夥乎。如<sup>ニ</sup>破竹<sup>ニ</sup>然」といふやうな、徂徎を研究する人が引用する古文辭学の神髓に触れた言葉が見られるることは注意すべきであらう。他にも徂徎はこの書の中で、

宋儒伝注。唯求<sup>ニ</sup>理於其心<sup>ニ</sup>以說<sup>ニ</sup>之。夫理者、無<sup>ニ</sup>定準<sup>ニ</sup>者也。聖人之心、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>得而測<sup>ニ</sup>矣。唯聖識<sup>ニ</sup>聖。宋儒之所<sup>ニ</sup>為、豈不<sup>レ</sup>倨乎。

といつて宋儒の伝注を排し、また

且古言簡而文。今言質而冗。雅言之於<sup>ニ</sup>俚言<sup>ニ</sup>也。華言之於<sup>ニ</sup>倭言<sup>ニ</sup>也。亦猶如<sup>ニ</sup>是歟。夫華言之可<sup>ニ</sup>訳者、意耳。意<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>言。理耳。其文采粲然者、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>得而訳<sup>ニ</sup>矣。

といつて、華言と和言との関係をも論じてゐる。景山の著書を見てゐることと思はれる。さうして徂徎の思想は、景山に影響を与へてゐたものあることを考へられるのである。

景山の学間的思想はその著「不尽言」によつて端的に知ることができます。この書の成立年代は明かではないが、内容から見て、恐らく比較的晩年、彼の思想が円熟した頃になつて、君侯の教養のために筆を執つたのであらう。学問や政治に関する問題について意見を具陳したもので、国文をもつて書き記されてゐる。景山はその中で詩歌に關しても一家言を述べてゐるのであつて、そこには富長の歌謡を考察するに際し、是非とも顧みなければならぬ思想が見られるのである。

「不尽言」の最初に述べられた学問に關する論には、古文辭学派の思想から影響を明かに認める事ができる。即ち「されば書と云もの皆中華人の言語なるゆゑに、ことごとく文字なれば、日本人の学文をするには、文字の意味を通達するが最初の事也」といつて、字義の研究が先づ必要であることを説き、それに關聯して、「すべて文字の意味は心にて合点せねばならぬものゆゑに、意味まではどうも和訓につけおほせられぬ。文字は皆大概に和訓をつけておかねばならぬこと也。それでその字の和訓のとほりにばかり、律義にこゝろうれば、意味の大きにちがふ類も多くあること也」と述べ、一般に和訓が漢字の意味を精確に伝へ難いことを論じてゐる。次に「彼の字義を辨ずる内には、又中華人の語勢をとくと合点せねば文字の意義に通達したばかりでは、又書が読まれぬもの也。しかるに中華人の語勢と、日本人の語勢とは、雲泥のちがひあること也。それゆゑ日本人の語勢を以て中華人の語勢を推量するによつて、心得ちがひが出来る也」といつて、漢文の語勢を理解して、これに習熟することの必要を説き、中華の直讀と日本の倒讀との相違について論じた後、「書を讀には日本人の心持をとんとはなれて、中華人

の心持になりかはつて見ねば、正直のことにてはなき也。日本人の心持である内は、書を読むに反り点なしに直読しては、どうしてその義理が通することぞと、いつまでも疑は晴ることあるまじき也」と述べて、中華人の心になり、漢文の直読に熟しなければ、所詮漢文の真義は理解し得ざるものとしてゐるのである。このやうに和訓の不精確さを衝き、漢文の直読可とする思想は、徂徠が「訳文筌蹄」の題言や「詩文國字廣」下巻において主唱した所であつて、景山は徂徎の思想を祖述してゐるといふべきである。景山は学問をするためには、先づ字義と語勢とを辨ずることが何よりも大切であるといふことを、多くの言葉を費やし、口を極めて主張してゐる。古聖賢の書は皆中華人の語であるから、中華人の字義と語勢とに通達しないでは、何をもつて古聖賢の語意を合点することができようぞと述べ、また字義と語勢とを合点しない初心の者に高妙な理を説き聞かせることは、私造の偏見を抱かせるに至る所以であることをも説いてゐるのである。さうして字義語勢を辨することはさほど難事ではないといひ、「只よく唐本を讀みて、唐人の語意をとくと知り悟つたる学者を求めて、唐人の語を日本人の語にあてがひ、違ぬやうに翻訳させて合点すれば、自然と字義にも語勢にも早く通ずるもの也。」その合点した字義語勢を和語にあてがひ書を読むが、書を読むの径なり」と、その方法を述べてゐる。これは徂徎が前記の書物の中で、学間に入る方法として、長崎の通訳官のごとく、唐音即ち中國語を学び、漢文を読むのに和訓廻説をもつてせず、中華の口語をもつて読み、それをわが近世の言葉によつて翻訳し、章旨及び高妙の理を求めないやうにすべきことを説いてゐるのに、そのまま倣つたものである。景山が徂徎の学問的方法を受け容れてゐること

は明かであらう。

かうして古文辭学派の方法論を重んじた景山は、「今世に学文といへば、初心の人には大学を講釈してきかせ、中庸などと説き聞かすことになりぬ。大学中庸などその理高妙なるものゆゑ、初心大体の人の耳にいらねば、聞かへつても精をつかし、つい怠りやめるやうに多くは成り……」といつて、朱子学派的な入門の方法を排斥し、「日本にて儒者と呼ぶ人のかく文章には、精出してかいこととを言ひ、羅山の文にも大きな間違ひがあるといつてゐる。このやうに学問の方法について、景山は父祖以来の朱子学の思想を墨守することなく、室鳩巢の如き典型的な朱子学者の眼からは異端視された、新儒学の巨擘である徂徎の思想を受け入れたのであつて、彼が決して偏狭な儒者でなかつたことは、たやすく推察することができる。

#### 四

学問的方法において徂徎の影響を受けた景山は、詩に対しても朱子学的な見解を固守することがなかつた。「不尽言」の中で、彼は朱子学の流れを汲む学者でありながら、詩の見かたについて朱子の説は信奉し難いことを明かに宣言してゐる。即ち、

愚拙経学は朱子を主とすることなれども、詩と云ものの「見やうは、朱子の註その意を得ざること也。思無邪と云を、朱子は人の詩を学ぶ法をの玉へると見られたるゆえに、論語の此所の

註に、勸善懲惡のこととせられたるなり。しかれども勸善懲惡と云は、春秋の教にてこそあれ、詩の教にてはなきなり。礼記にもすでに人の溫柔敦厚になるやうにとするが、詩の教じやと云てあることなり。

と述べてゐるのである。朱子は「論語集註」で為政篇の「思無邪」を解して、詩に感發懲創の用があるとなし、更に「其用帰於使<sup>人</sup>人得<sup>其情性之正</sup>而已」と言つてゐる。景山はそれに賛成することなく、勸善懲惡は「春秋」の教へであると述べ、溫柔敦厚が詩の教へであるといふ「札記」經解に見える孔子の言葉をあげて反駁したのであるが、景山のこの見解にはやはり徂徠学派の思想が影響してゐるものと考へる。徂徠が朱子の勸懲説に反対してゐることは、「辨道」や「答問書」などを見ても知られ、すでに言ふまでもない。春台は「朱氏詩伝」附載の讀朱氏詩伝の中で、

夫懲惡勸善者。春秋之旨也。春秋者實錄也。故善惡皆書<sup>レ</sup>之。惟仲尼因而修<sup>レ</sup>之。明<sup>ニ</sup>褒貶<sup>レ</sup>。行賞罰<sup>レ</sup>。以勸<sup>ニ</sup>懲<sup>ニ</sup>之。所<sup>ニ</sup>以立<sup>ニ</sup>王法之大經<sup>ニ</sup>也。仲晦乃以<sup>ニ</sup>是說<sup>レ</sup>詩。豈不<sup>ニ</sup>謬哉。

と論じて、勸善懲惡は「春秋」の旨であり、朱子がこれをもつて詩を説くのは謬りであるとなし、更にまた詩については、

孔子曰。其為<sup>レ</sup>人也。溫柔敦厚。詩教也。若持<sup>ニ</sup>是非之論<sup>レ</sup>。而偏<sup>ニ</sup>好惡<sup>レ</sup>。則豈溫柔敦厚之意哉。

と述べ、「札記」に伝へる孔子の言葉を引き、人と為りの溫柔敦厚となることが詩の教へであるとしてゐる。同様の趣旨を春台はその著「六經略説」の中にも述べてゐるが、右の景山の所説は、春台の言ふ所と全く軌を一にする。景山は恐らく春台の著書を読んでゐたものと思はれ、当時の学界の情勢から考へて、景山の詩に関する思

想は、やはり徂徠学派の影響を受けたものと見なければならないであらう。六經の中の一經を修め得れば、他經を用ひずして足らざる所がないといふのは宋儒の思想であり、六經を重んじてそれを強調のあることを説くのは徂徠学派の思想である。景山は春台と同様に詩の独自の用を指摘して、勸懲は「春秋」の教へであるといひ、朱子の詩教を斥けたのであつた。「不尽言」において景山が詩歌に関して論する所は、このやうな詩に対する徂徠学派的な見解から出発してゐる。

かうして詩を徂徠学派的に認識した景山は、当然「詩經」は人情を知らせるための書であると解し、詩は結局人情の発露したものに他ならないと考へた。「詩と云ものゝ出来るのは、人の五倫朝夕交る間の事につけて、人の七情が動き發り、内に鬱々積つてどふもたまらぬものが、我と覚えしらず詞に自然と發したもの也」と説いてゐる。さうして和歌もまた同様であると述べ、「和歌」と云ふものも、本は詩と同じものにて、紀貫之が古今集の序に、人の心を種として萬の言の葉とはなれりけりといひ、見るもの聞ものについていひ出せるといへば、詩の本意と符合せるもの也」と論じてゐるのである。ここで注意すべきは、このやうな詩歌の原理に関する限りにおいて景山は朱子の「詩集傳」の序にある「發<sup>ニ</sup>於吟嘆咏之余」を認めであるが、「思無邪」の解釈においては、朱子が「邪」を人の邪惡の心と解くのを排し、「思無邪」は実情の発露であつて、「善惡邪正ともに、人の内にひそめたる実情のかくされぬものは詩にあることなり」と述べてゐることである。春台が前記の讀朱氏詩伝に「今夫詩者。人情之形<sup>ニ</sup>于言者也。仲晦乃以<sup>ニ</sup>邪正<sup>ニ</sup>是非<sup>ニ</sup>言<sup>レ</sup>之。豈不<sup>ニ</sup>謬哉」と論じてゐるのと同じく、これもまた徂徠学派的な見解とすべ

きであらう。また景山は「論語」為政篇の孔子の言葉に關して、「詩は三百篇あれども、一々皆人の思無邪より發出したるものにて、人の実情のすぐにはあらはれたるものなりとの玉へることなるべし。和歌の道も此とほりに少しもかはることはなきものゝ、只唐山大和と人の語言のちがひたるばかりにて、共に人の思無邪になるところより發出せるものなり」と論じてゐるのであり、このやうに詩歌同趣説に立つて、詩と和歌とを対等に考へることは、徂徠学派の思想と見なされ（樟蔭文学・第五号・拙稿参照）、徂徠が「異國とわが國は風俗大に異なる中に、唯詩と歌との道ばかり詞のことなるのみにて、其趣全くおなじ」（春台・独語）と述べた思想と同一のものであるとしなければならない。

景山は詩歌は人の実情の発露したものと見て、その本質に就いては右のやうに徂徠学派的な思想を抱いたのであるが、彼はその本質論から出發して、徂徎学派の特に詳説しなかつたと思はれる問題に論及してみて、しかもその問題は、宣長の歌論を考察する上で看過できないものと考へられる。彼は

さて人情のことを論ぜば、即ち札記に飲食男女は人の大欲存焉とある聖語の如く、人情の最も重く大事なるものは男女の欲なり。

と言ひ起し、男女間の欲情について詳しく述べ、それが実情の表出である詩歌とは密接な関係をもつて、和歌の道においても恋を重んずる所以を説いてゐる。男女の欲は人情の中でも最も重いものであります。

聖人の第一に慎み畏れる所なるが故に、「詩經」の初めにも先づ閨雌の詩を載せて、夫婦の間琴瑟相和する情思の正大高雅な風を以て人に示したのみならず、閨雌は「樂而不淫」（論語・八佾）と説か

れてゐると述べ、また「風雅集」の序に和歌の様を論じて、「艶なるは姪れやすく、木強は雅馴ならず」（流布本序には「艶なるはたれ過ぎ、強きは懷かしからず」とあるのは、かの樂と淫との分れに通じ、詩の本意にも自然となつて、和漢古今の人心の少しも変わらぬことがめでたいと言ひ、恋歌については、

和歌は我朝古來の宗匠の論にも、恋の歌を以て最も大事とし、重きこととしたことも、夫婦の情は人情の本原にて、和歌のよつて起るところなれば、萬葉集にも相聞とて、恋の部の歌を巻首に載せ、全体にこひの歌多く入れられ、其後の代々の撰集にも、恋歌を最も多く載せてこれを主とすることなり。

と論じてゐるのである。さうして

俊成卿の歌に「恋セズバ人ノ心ノナカラマシ物ノアハレハコレヨリゾ知ル」と詠せられしは、左のみ秀歌にはあらずとも、その意趣向上なることにして、人情によく達したことなり。

と、俊成の歌をあげ、恋といふものが人情に通達すべき契機となることを説いてゐる。恋の意味については、「恋といへるは、夫婦の思慕深切なるところの実情をいへることなるべし」と述べてはゐるが、思慕深切の実情といふことを広くおし及ぼして考へる時には、父子兄弟の間の愛情も、君臣朋友の間の交情も恋といふことができ、思慕深切の実情は孟子のいふ「不仁忍人之心」であり、とりもなほさず仁の本体であるとまで言つて、右の俊成の歌につき、

心のなからましと詠せるは、俗にいへる心ないと云義なれば、人としても人情にうとくあらば、物事に細かに気がつかず、覚えずと心ないこと出来て、あつゝかかるむごいことあるべ

し。人情に通達せずして、何として物のあはれは知るべきやう  
はなきことゝいへる、後成卿の意なるべしと思はるゝなり。

## 五

かるゆゑに人情に通ずるは仁を求める方術なり。

と説明を加へてゐる。景山はもののあはれを人の深切の実情と解してをり、右の文には儒者の思考法が指摘せられるにせよ、結論的には「夫婦間の思慕深切なる実情は、いち大事なる重きことなれば」と明記する。

我朝和歌の道も自然とこゝを以て大切とする所以なり」と述べて、和歌の道では恋が大事とせられる所以を言つてゐるのである。凡俗の朱子学信奉者でなかつたことは明かで、この思想は「紫文要領」や「石上私淑言」における宣長の人情論に通ずる。

「不尽言」の中には、和歌の秘伝や古今伝授といふものが、根拠のない拵へごとあることをも論ぜられてゐる。秘伝については、理窟を臆断によつて拵へたものであらうといひ、「元来和歌の道に秘伝と云ふことあるべしとも思はれず」と述べてゐり、古今伝授についても、「後人奇怪のことを拵へ 古今を売るものゝ作りしことなるべし」などといつて非難してゐるのである。それらのいはれのないことは、歌学を歴史的に考察して論ぜられてゐるのであるが、その中で契沖の説を引いて、伝授が古くは存しなかつたことを強調してゐるのは注意すべきであらう。「契沖師は水戸の文庫の秘書をも偏く見、その外歌学を極めし宏贊逸材の人なれば……」といつて、契沖の学説には心から信頼を寄せてゐたのであつた。契沖の門人今井似閑と交りのあつた事実は「不尽言」の記事からも知られ、契沖の学問の精神は似閑を通して景山に流れ込み、その精神が宣長を啓發するに至つたのである。

宣長は京都に遊學して景山が没するまで師事してゐたのであつて「不尽言」は当然読んでゐたに相違ない。鈴屋に藏せられる「玉勝間」の原本の第二巻には、景山の「不尽言」からの抜抄として詩歌論が載つてゐるのである。

「排廬小船」や「石上私淑言」の歌論には「不尽言」に見られる景山の思想と関係を持つ所があるが、その関係についてはこの小論では触れないことにする。ここでは京都遊學中に、儒生の宣長の心に芽生えた歌論的なものを述べ、それが景山からの感化があることに注意をしておきたい。「本居宣長稿全集」第二輯所収の書簡の六と七とは、尾門の友人である清水吉太郎（清童子）に贈つたもので、ともに漢文で書かれており、年紀不詳であるが、遊學の終り頃（宝曆七年頃）のものと推定され、その中には当時の宣長の儒学や和歌に対する見解が見られる。それらを見て先づ注意すべきは、宣長が儒学について徂徠学派的な思想を抱いてゐることである。六の書簡には、

儒也者。聖人之道也。聖人之道。為國治天下安民之道也。  
非所以私有自樂者也。夫孔子距文武周公不甚遠。先王之礼樂刑政未泯。遺化尚存焉。而其道弗行。晚知其不可也。  
遂修六經傳。諸後世矣。  
といつてある。これは全く徂徠の思想の祖述である。徂徠は「先王聖人也。故或謂之先王之道。或謂之聖人之道」（辨名・中）といつてをり、宣長のいふ「聖人之道」も即ち先王之道であつて、「先王之道。安天下之道也」（辨道）とは、徂徠が力をつくして説く所

である。その天下を安んずる道は礼樂刑政に他ならない。徂徠は、「礼樂刑政。先王以是尽于安天下之道」（同）といつてある。さうして徂徠もまた孔子の事業について、「及其終不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>位。而後修<sup>ニ</sup>六經<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>伝<sup>レ</sup>之。六經即先王之道也」と述べてゐるのであり、宣長の儒学における思想は徂徠の思想を承けてゐるといはねばならない。七の書簡にも、やはり聖人之道安<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>之道也。非<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>卷<sup>レ</sup>而懷<sup>レ</sup>者<sup>ニ</sup>也。

といふ言葉が見える。また不佞之説<sup>ニ</sup>六經論語。唯玩<sup>ニ</sup>其文辭<sup>ニ</sup>而已矣。

と述べてゐる所にも、古文辭學の影響は明かに見られるであらう。鈴屋藏の「玉勝間」の原本の最初の方には、徂徎の「辨道」や「辨名」からの抜抄がある。これらから推定すれば、宣長は景山によつて徂徎学をも教へられたものと思はれる。「不尽言」の思想から見ても、景山は徂徎学の私淑者であつたと言ふことができ、右の宣長の思想が徂徎学派のものであることは、すでに疑ふべからざる事実である。宣長の歌論に徂徎学派的な考へ方が認められるのが、決して偶然の一致でないことは、右のやうに在京中の彼の儒学思想からも肯定せられるのではないかと考へる。この点は未だ注意せられてゐないやうであるが、無視すべからざる事実であらう。

さて宣長は右の二つの書簡において、徂徎的な儒学思想の上に立ち、和歌を儒道に比較して論じてゐる。歌道と儒道との区別について、七の書簡では、

和歌之与<sup>ニ</sup>聖人之道<sup>ニ</sup>也。其類大異而固非<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>抗敵<sup>レ</sup>者<sup>ニ</sup>也。……

和歌也者志<sup>ニ</sup>大道也。儒也者安<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>之大道。……

これは朱子の詩教に反対して、詩は人情を述べたもので、勸懲の

教へのあるものではないと説く景山の思想と通ずる思想であるが、根本的には、春台がその著「六經略説」の最後の条において、「聖人ノ道ハ唯ヒトスズナリ。一スヂトイフハ、天下ノ民ヲ安クスルトイフ一塗ノ外ニ出ルコトナシ」といひ、宋儒が「詩經」一經のみをもつて天下を治め得ると説くのを排撃して、「詩ハ人情ヲアリノマニ吐露スルノミニテ、深キ義理ナキ者」と述べてゐると同じく徂徎学派の思想に由来するものと見なければならないであらう。さうして宣長のこの思想は「排蘿小船」や「石上私淑言」の歌論にも連つてゐるのである。

宣長は和歌を好むに至つた理由について、六の書簡の中で次のやうに述べてゐる。

僕不佞幼而好<sup>ニ</sup>学。長愈益甚。稍々取<sup>ニ</sup>六經<sup>ニ</sup>而讀<sup>レ</sup>之。歷<sup>ニ</sup>年略通<sup>ニ</sup>大義<sup>ニ</sup>。乃謂。美矣哉道也。大可<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>治<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>。小可<sup>ニ</sup>以為國矣。然吾儕小人。雖<sup>ニ</sup>達而明<sup>ニ</sup>焉。亦何所<sup>ニ</sup>施乎。孔子所<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>曾晳<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>觀而見<sup>レ</sup>已。点也孔門之徒。而其所<sup>ニ</sup>樂不<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>先王之道。而在<sup>ニ</sup>浴沂詠歸矣。孔子之意。斯亦在<sup>ニ</sup>此而不<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>彼矣。僕有<sup>ニ</sup>取<sup>ニ</sup>于茲<sup>ニ</sup>而至<sup>ニ</sup>好<sup>ニ</sup>和歌<sup>ニ</sup>。不<sup>ニ</sup>獨為<sup>ニ</sup>是。僕之好<sup>ニ</sup>和歌<sup>ニ</sup>性也又辨也。

ここにも儒学と和歌とを区別する宣長の思想は見られる。彼は幼年時代から学を好み、長じて六經を学んだが、それによつて知つた先王の道と彼の嗜む和歌とは別であるといつて、それを説明するのに「論語」先進篇にある曾晳の話を例にしたのであつた。孔子が治國安民のことを述べた三子の志に從はず、暮春三月春服すでに成り沂水に浴し吟詠して帰りたいと述べた曾晳の希望に賛成したといふことを例にして、孔子やその徒の楽しむ所が先王の道ではなかつた

と言ひ、彼が和歌を楽しむのも先王の道を学ぶこととは別事であると論じ、しかも彼が和歌を好むのは性癖であると述べてゐるのである。そのやうに和歌と先王の道とを区別した後、宣長は「和歌為情之道也固亡<sup>レ</sup>論矣」と言ひ、和歌は各時代の人情を反映して、この風が時とともに移ることを説いてゐる。その中には「文質彬々<sup>ヲ</sup>惟古今集有焉。以為ニ載之規短準繩<sup>也</sup>」とも論じてゐてもとより「新古今集」のことなどには触れてゐないのであるが、和歌が必ず國の道や道徳とは別個のものであるとする「排蘆小船」や「石上草<sup>シ</sup>淑言」などにおける思想は、すでにここにその萌芽が認められるのである。

以上のやうに宣長は景山門下の儒生であつた時代に、和歌の本質については、後年の歌論に発展すべき思想を抱いてゐたといふことをができる。繰り返し述べたやうに、そこには徂徠学派の思想の影響が考へられ、宣長が景山の門人であつたことを思へば、その影響は景山の教育から得たものと考へなければならない。景山は詩については朱子の説を排し、徂徠学派的な思想を抱いてゐたことが知られるのであり、右の書簡に見える徂徎学派的な思想が、景山の思想と無関係であるとは、到底考へられないものである。もしも景山が厳格な朱子学者であつたとすれば、少くとも景山に師事してゐた頃の宣長が、景山門下の同僚に向つて、右のやうに徂徠学の思想をもつて道を説くこともしなかつたに相違ない。景山が徂徠に物を問ひ、「不盡言」に徂徠学の影響が見えるのが事実である以上、在京時代の宣長の抱いた徂徠学派的な思想に、景山からの感化のあることは当然といふべきであらう。前述の如く当時の宣長が表立つて学んでゐたのは漢学と医学である。国学や和歌は余技的に学んでゐた

のであつた。中でも漢学に多くの力をそいだことは「在京日記」を見ても明かであり、景山の歿するまで遊學師事して、その間に宣長の歌論は萌え出たのである。宣長の歌論の特性を考察しようとしても、いづれにしても景山からの影響を軽視してはならないであらう。

大阪大学教授